

## 「不登校児童生徒支援のための学校設立事業」

# 不登校になった子どもたちや家族、 そして地域に光をもたらし助成事業



新しい学校作りには、学びの方法、建物の内装、机の形、カーテンの色、スペースの使い方をはじめとして、フリースクールに通う子どもたち、親、スタッフ、ボランティアの学生等、現場の声が生かされている。写真は子ども、スタッフ、東京理科大建築学科のゼミ生との協働で、中学校の内装について検討しているときの様子

### 助成団体 特定非営利活動法人 東京シューレ

不登校児童生徒の増加が社会問題となるなか、21年にもわたり不登校児童生徒を受け入れ、元気と自信を回復させる指導方針で自立に向けた成長支援を行ってきたフリースクール・東京シューレ。不登校児童生徒が安心して学び成長するために、構造改革特区制度を利用した学校法人設立を目指す事業に助成。平成19年(2007年)4月、葛飾区の廃校を利用した「東京シューレ葛飾中学校」が開校した。

## 構造改革特区制度を利用し、学校法人を設立

現在、日本全国で不登校児童生徒は12万～13万人の規模に達しているとされる。そうした不登校児童生徒の受け皿の1つになっているのが、フリースクールである。ただし、現在の教育制度上、フリースクールは学校と位置付けられていない。不登校児童生徒への対応は、あくまで義務教育機関への復帰に主眼が置かれている。そのため、フリースクールで履修しても、卒業資格は取得できないのが現実だ。

生徒たちが卒業資格を得る条件は、在籍校に籍をおくこと。フリースクールと在籍校の2つに籍を置くという、いわゆる「二重籍」という状況が発生していた。

東京シューレは昭和60年(1985年)の設立以来、親や市民の活動として、不登校の子どもたちに、居場所と教育の場を提供してきた。活動のなかで目標としてきたのは、フリースクールが卒業資格を出せるようになること、そして社会的な信頼を高めること。そのためには不

登校の児童生徒の正規の学校作りが求められていた。

平成18年(2006年)より構造改革特区制度を活用して、東京葛飾区の廃校を利用して中学校を設立、学校法人の設立を目指すこととなった。

同年5月、東京都葛飾区が内閣府に「地域連携・のびのび型学校による未来人材育成特区」を申請、認定を得た。同年8月、東京シューレは都に学校法人設立及び学校設置認可を申請、11月14日同じく認可を得た。申請に際しては、フリースクールの生徒の保護者、これまでの協力者に働きかけ寄付金品を募り、設立認可に必要な額を達成。機構の助成金は、その資金の一部として活用された。校地・校舎を借用し、NPOを中心とした市民が作る学校(中学校から)のスタートとなった。

平成19年(2007年)4月、新設した東京シューレ葛飾中学校には、初年度85名の子どもたちが編入・入学した。

## 学校作りから見つけた、新しい共生のカタチ

これまでの不登校支援活動は、どうしても保護者が中心であり、当事者性の強い活動であった。構造改革特区を活用することで、参画者も増加し、行政との連携も図ることができた。また、校地・校舎の有効活用によって、地域町会、商店会・まちづくりNPO等による多様な協働・協力が今回の成果へとつながった。

今回の「学校作り」は、これまで公教育外に位置付けられ、公的支援がまったくなかったフリースクールに1つの将来像をもたらすとともに、不登校の子どもやその家庭にとって、未来の可能性を広げる大きな成果となった。

何より、学校・教育を自らの手で創出する、保護者や市民・地域による学校作りという新しいコンセプトを生み出した。

地域における人材育成を実現し、少子化により廃校となった校舎に再び子どもたちの歓声が戻ることで、地域を活性化し明るさを取り戻したという側面も見逃せない。

不登校支援活動という点では、直接の支援者数を増やせたこと、学校作りの活動によって団体の社会的なアピールが高まり、マスクミ等の取材、NPOや行政、親や市民からの問い合わせが増加し多くの関心を集めるなど、この学舎を起点に、教育の新たな形が生み出されていくだろう。



### 子ども、保護者、スタッフ、地域による協働が大事



早稲田大学 教授  
喜多 明人氏  
学校法人  
東京シュール学園理事  
専門：  
教育行政学、  
学校建築学、  
子どもの権利

東京シュール学園に関わることで、学校をなかから変えていけるなら、チャレンジする価値は十分にあると感じました。教職員だけで学校を変えるのはもう難しい時代なのかもしれない。学校をなかから変えていくのと外からこじ開けると、まんべんなくやっていかないと、正直、日本の学校は変わらないと感じています。日本

の学校を変えていけるとしたら、子どもたちや保護者、あるいは住民が学校に参加することこそ大事になります。東京シュール葛飾中学校のように、子ども、保護者、スタッフ、地域が主体的に関わり、「つくりつけていく学校」ということをこれからも大事にしていくことが必要なのかもしれません。

#### 入学・編入学した 子どもの声

●普通の学校ではできないことをいろいろやってみたい。自分たちで旅行を計画したり、今までスポーツをやるのがなかなかなかったので、学校のグラウンド、体育館を目一杯使いたい。

●自分だけでなく、不登校を経験した子どもたちが来ている学校なので、安心して通える。今まで本当の友だちに出会えることがなかったので、この学校でたくさん友人を作っていきたい。

#### 実務担当者より



木村 砂織さん  
学校法人東京シュール学園理事  
東京シュール葛飾中学校 教頭

東京シュール葛飾中学校を作る準備のなかで、フリースクールの子どものたちからは「東京シュールが卒業資格を出せるなら、それにこしたことはない」という声が一番多くありました。子どもたち自身が学校設立を望んでいたこと、NPOの活動のなかから私たち自身が必要と考えていたこと、そして構造改革特区制度による規制緩和があったこと、すべてがよいタイミングで重なったといえます。私たちの「学校作り」を報道等で知った全国各地の方々から、本当にたく

さんのメールやお手紙、電話をいただきました。「こういう学校を待っていました。やっとそういう時代になったんですね」「うちの子はもう中学年齢ではないけれど、何とか応援したい」「開校すると聞いて、いてもたってもいられなくて電話をしました」など、一つひとつの声に大変励まされました。

開校後こそ、より大切であると考え、これからは「作りつけていく学校」として、日々精進して取り組みたいと思っています。